

人種差別とは何ぞ(一) 令和二年八月 加藤 淳平

人種差別とはいかなるものぞ。我、初めてフランスに行きし初め、アジア人なるが故の差別を受く。フランスの差別に、二つの特徴あり。一に、庶民にほぼ差別の意識も態度も無く、差別感強きは、下層的階層の人々にして、時に行動にそれを表す。二に、斯かる人々として、差別は、人種的ならで、言語的・文化的にて、「異人種の人」より、「フランス語を話さず、フランス乃至西ヨーロッパの文化を敬せざる人」を差別の対象とす。我、日本にて長年フランス語を学び、該國到着後短期間に、會話にも習熟し、またフランスに赴きたる當初は、フランス文化を心より崇敬し居れば、我が差別を受けたるは、最初の二、三月のみなりき。

斯く短き期間なれど、その間に受けたる差別に對する嫌悪感と、差別せる者に對する憎しみ、如何なる言葉もて、表現する能はん。今も、それを想起する度に、身内より沸き出づる憎惡の念の、身體全體を打ち震はしめ、邊りに人無くば、齒ぎしりして、「この野郎」、「こん畜生」など、大聲に罵らんずる衝動を、抑ふること難し。

その後、フランス語會話に習熟せる後は、フランス人多數と友人關係を結び、第三國にても、多くの該國人と親しく交際す。見知らぬフランス人あらば、ほぼ一瞬のうちに、この人の、差別を事とする者なるや、それを嫌ふ者なるやを見抜く勘を身に付けたれば、前者は相手とせず、後者なりと思はるれば、フランス語にて話し掛く。

フランス人の十中八九、社交的にして、人なつつこき性格なれば、自國外の、英語の廣く通用せる世界に、外國人の、自國語にて話し掛くるを悦ばざるは尠し。況して多くのフランス人、日本乃至日本人の、自國とその文化を愛好するを知れば、些かの優越感もて、日本人には好意を抱く。況んや日本人の、フランス語を操るに於てをや。忽ち心を許し、「世界各地を旅行せるも、フランスの

如き麗しき國土にも、パリの如き美しき都市にも、逢ひたること無し、ニ云々」等の自國礼讚を始め。確かにフランスは麗しき國土にして、パリは美しき都市なれど、渠等が手放しのナルシシズムには、些か食傷せざる無し。

されど暫し我慢して、之に附合はば、我が未だ知らぬ地の、安價なれど清潔にして、フランス語の良く通ずる宿舎を教示し呉る等、有益なる情報を得ること多し。ヨーロッパならば、斯かるフランス人のネットワークを利用せば、快適に旅行するを得るなり。

斯く我、國土としてのフランスと、よきフランス人との交際ならば、之を嫌ふに非ざるも、最初の該國到着時の差別は、いつまでも忘る能はず。外務省に於ける我が専門語學、フランス語なれば、フランス國內のポストを提示せらるること多かれど、それを悉く受けず、結局我一生、二度とフランス國內のポストに赴くこと無く了りぬ。2015年フランスに、「シャルリ・エブド」事件なるもの起これり。日本のジャーナリズム、「シャルリ・エブド」と報ずるも、「エブド」とは「週刊紙」、「シャルリ」とはフランスでは「チャーリー・チャップリン」（但し今の週刊紙関係者は米漫画ピーナッツのチャーリー・ブラウンのことなりと説明す。そは現在の一定年齢以下のフランス人には、チャップリンよりピーナッツのチャーリー・ブラウンのよく知られたる故ならむも、ピーナッツのチャーリー・ブラウン、チャップリンと異なり、諷刺の指針となり得る人物に非ず）のことなれば、「週刊チャップリン」とするが、讀者に親切なる譯ならむ（されど本稿にては紙名を「シャルリ・エブド」とす）。この「シャルリ・エブド」、國內・國外の事象を、揶揄・嘲笑するフランス式左翼諷刺・ユーモア週刊紙にして、諷刺畫を多く掲載す。

フランス式ユーモアなるは、自らを嗤ふを主眼とせる英國風ユーモアと異なりて、フランス文化とフランス的ものの見方を至上視し、その視點より、異文化と異なるものの見方を、自己中心的に見下し、嗤ふ傾向ありて、客觀性に缺くる嫌ひあり。我が如き異文化の者、斯かるフランス式ユーモアに對し、時に、不快感を禁じ得ず。

この週刊紙、前名を「アラキリ」といふ。「アラキリ」とは「ハラキリ」、つまり日本式切腹のことなり、我、「アラキリ」時代の記事内容は知らざるも、大方は想像するを得。我がパリの大使館勤務時、時折テレビにて、日本を題材とせる下劣なる巫山戯番組を見たればなり。

フランスのテレビの、巫山戯番組が一例を擧ぐれば、次の如し。舞臺は日本の戸外なり。遠くになだらかなる山など、如何にも日本らしき風景の書き割りあり。數人の、藝者と覺しき女、何れも奇妙なる髪型にて、奇妙なる衣裳を身に纏ひ（日本髪や着物のつもりならむも似ても似つかず、いかにも安っぽし）、喜劇的身振りにて登場、互ひに掴み合ひの喧嘩をなす。そこへフランス人の男一人登場すれば、女たちは皆男に媚び、追ひ駆け、しなだれ掛からんとす。舞臺替り、木と紙の粗末なる家の室内に、藝者等、幾つかの樂器を演奏す。戸外にフランス人の男來たりて、室内の藝者等と、窗越しに言葉を交はす。男室内に入らんとし、女たちは門口に廻れと言ふも、男、窗の横の壁を蹴れば、紙と木の壁

は、脆くも倒れ、男は土足にて、室内に上がり込めば、藝者等皆樂器を棄て、亦男を追い、等々。

この番組、視聴率高き時間に放映せらるれば、日本人と日本の文化に対する侮蔑的扱ひに、我、不快感を覺えたり。されば日本大使館として、フランス國營テレビ局に抗議すべしと考へ、抗議文起草し、大使館内の決裁を得むとすれど、下劣なるテレビ番組に一々抗議するは、大人氣なしとて、上司の承認を得られず終りぬ。

「シャルリ・エブド事件」に戻らば、この週刊紙、屢々、イスラム教の豫言者ムハンマドを、揶揄・嘲笑せる記事と、ムハンマドが戯畫を掲載せりと傳ふ。人知る如く、イスラム教にては、偶像崇拜を排するにより、ムハンマドに畫像無し。ムハンマドが戯畫を掲載せるは、畫像もてムハンマドを表現せると、表現の戯畫なると、二重の侮辱なれば、之に憤激せるイスラム教徒アルジェリア系フランス人兄弟（事件後逃亡中射殺）、編集會議開催中の同紙編集部を襲撃し、會議出席者の編集者、記者、諷刺畫家、警官（こは皮肉にもイスラム教徒なりき）等十二名を、射殺せり。

我がパリ大使館に勤務せるは、一九五〇年代にして、二〇一五年の事件まで、半世紀以上を經過すれば、上記「シャルリ・エブド」の、イスラム文化に對する揶揄的記事の、根底に在るフランス的差別意識は變らねど、フランス社會に、事件發生前は、シラク大統領の「危険なまでに感情を刺激する明らかな挑發」なりと批判せる等、良識も亦育ちたり。

されどフランス全體としては、事件前とて、シラクの如き發言は極少數にして、大方は「シャルリ・エブド」がイスラム蔑視記事に同調す。況して事件發生後は、事件の衝撃強烈にして、十二人に昇りし犠牲者を悼む餘りならむも、フランス全土に、恰も十二人の犠牲者等、「言論の自由」がために戦ひて、殉教せる戰士なるが如く、英雄視せる言論一色となれり。

事件を起こしたる犯人の行動は、明らかなるテロなれば、之を非難するは當然なるも、さりとてローマ教皇の述べたる如く、「あらゆる宗教には尊嚴あり」、「他人の宗教を侮辱・嘲笑」するは控ふべしとするが、本來の、フランス人の平素標榜する理性的態度ならむ。

されどこの時期のフランス、國を擧げて、異常なる興奮状態にあり、イスラム教・イスラム教徒に對する非難・攻撃・嫌がらせ、全土に相繼ぐ。斯かる情況下に、理性的態度を標榜せば、袋叩きに逢ひたること必定なりけむとは、日本にても良く知られたるフランス知識人が言なり。

フランスが異常なる興奮状態、今も續けるにや、本年も一中學教師、「表現の自由」の授業の題材なりとて、「シャルリ・エブド」掲載の畫像を使い、一部の、イスラム教徒ならむ父兄を憤激せしめ、ロシア人イスラム教徒より殺害せらる。

下層インテリ階層のフランス人の、斯く自らの文化的・宗教的差別意識を、反省は愚か、氣附くこと毫も無く、イスラム教を侮辱するを、「自己中心的に」、當然の「言論の自由」なりと言ひ募るこそ、フランス乃至フランス人の差別のあり方ならめ。

尤も「シャルリ・エブド」事件の發生當時は、フランス人のみならず、西ヨーロッパ一圓に、「近代」西ヨーロッパ的價値への、固執と執着の情念を、惹起せるが如く、英國首相すら、上のローマ教皇の言に反對意見を述べたり。之に對しアメリカの輿論、冷靜に事態に對應し、西ヨーロッパ人の情念に、同調せざりしは流石なり。

(令和二年十月二十四日受附)